

AI新時代

変革に挑む県内企業

▷ 5 ◁

2035年、工場から人がいなくなると言われていて、**会議**が行われる。リダー役が招集し、各担当（AI）がもたらす未来についてこう問うと、AI関連ベンチャーAritimer（アリスマー、東京）の大田佳宏社長（鳴門市出身）は、「それほどじゃないかもしれませんが」と答えた。

同社は、業務効率化のツールとして急速に広がる生成AIと違い、人間の指示がなくても自らの判断で複雑な業務を行うAIエージェントの開発に力を入れる。特に強みとするのが、視覚に特化したビジョンAI。人間の標準視力の14・5倍の「目」を武器に、製造業の検品などに導入されている。

50人分の仕事をAIが担うある工場では、傷の検知やデータ解析などの業務に

語を使い、ものの数分で終える。

結果をデータ化し、リダーが改善のためにどう動くべきかを各担当に指示。早朝や夜中も24時間会議が開かれ、作業の精度を高め、いく。この一連の過程に人間は一切介在していない。

米国を中心に加速する身体機能を持ったAI、いわゆるAIロボット開発に

も、同社は参入している。石油コンビナートなどで計器の数値確認や見回りなどを担う四足歩行のイヌ型ロボットや、5本指を使い部品の組み立てができるアーム型ロボットを製作。人型ロボットに同様のアームを装着し、資機材の搬送に使えるようにする計画もある。

いずれのロボットも、24時間の交代勤務や技術を要する洗濯も食器洗いも料理

開発最前線



【上】5本指のアームでコンテナを持ち上げイヌ型ロボットに載せる人型のAIロボット（左端）。資機材の搬送などのニーズを見込み開発を進めている【下】イヌ型のAIロボット。巡回中に不審者を発見すると映像に記録し管理者に送る（いずれもアリスマー提供）



人を介さぬ会議 現実

自律型ロボット 実装段階へ

んなものなのか。

大田社長は、AIに取って代わられる仕事は、もとも人間が疲れ果てるような苦しい仕事だとし、「人間はもっと楽して、やりがいがある仕事をやるべきだ。作業をAIに任せ、人間は空いた時間で創造的な仕事に移る。そうすれば、企業の収益性が上がり、給与も上がる」と強調する。

現に、同社員は約50人と少数だが、その裏で数回のAIエージェントが経理や人事、プログラミング業務などに当たっている。生産性の向上とAI需要の高まりも相まって、6年前に比べ1人当たりの売り上げは5倍に増えた。

AIは地方経済にメリツトをもたらす可能性もある。大田社長は、人件費抑制のための海外への製造移管に歯止めがかかり、国内生産への回帰が起るとして「徳島とはわがかりがない企業が、県内に工場を建設するかもしれない」と予測した。

（尾形つぐみ）